

TRANSITION TO HEALTH (022)

「早期発見」から「健康の創造」へ ③

～ 欧米で普及する代替療法に学ぶ ～

はじめに

前号 No.21 では、アメリカ政府は1988年 OTA リポートで『従来の手術・抗癌剤・放射線のいわゆる“癌の三大療法”より“自然療法”の方が、癌を治す』と断定し、また、今から9年前の2005年の時点で、既にアメリカでは癌治療法の比率は「**三大療法：自然療法＝4：6**」と、**自然療法が優位**となっていたが、日本では未だに「**三大療法：自然療法＝10：0**」のみまであるとお伝えしました。一般に、アメリカ人の70%の人は、自然療法（代替療法）を受けた経験があるといわれています。今回も**代替療法（癌に対する自然療法）**についてお話ししましょう。

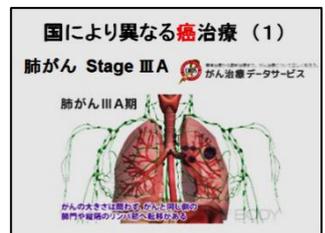
日本と欧米の代替療法の位置づけの差

アメリカでは1990年以降、国民の癌の罹患率・死亡率ともに減少し始め、1998年に ACS（米国ガン協会）、CDC（疾病対策予防センター）などの合同研究チームが「**アメリカの癌の罹患率と死亡率が低下している**」と正式に発表しました。ところが、日本では悪性新生物（癌）が1981年に脳血管疾患を追い抜いてから**トップを独走**し続けています。日本人の食生活が牛乳・乳製品・植物性油脂・肉（赤身肉・加工肉）やパン（全粒粉でない精製小麦粉）を中心とする**アメリカン・スタイル**になってから、肺癌以外の大腸癌・乳癌・前立腺癌などの癌の罹患率も上昇し、今では「**2人に1人が癌になる時代**」といわれています。この日米の差は、「**代替療法の位置づけ**」にあるのです。

かつてのドイツに代わり、現代医学の最先端を突っ走っていた**アメリカ**が、1992年、日本の厚生労働省にあたる NIH（米国国立健康研究所）に「**代替医療部**」が設置され、10年後の2002年には、アメリカの医科大学の約**6割**が**代替療法のカリキュラム**を導入し、大学医学部の**3割強（75校）**が、**代替療法の講義**に年間**100時間**を費やしていました。今から12年前の話であるが、日本では今現在以ってしても、ほぼ**0割、0校、0時間**という状況である。

国により異なる癌治療法・・・肺癌ステージⅢA の場合

肺癌ステージⅢA の場合、5年生存率は約20～30%です。小細胞癌の場合は放射線と抗癌剤が中心、非小細胞癌の場合は手術が中心で、術前術後に放射線治療が行われます。どちらにしても日本では**三大療法が100%**です。ところが、**カナダ**の肺癌専門医へのアンケート調査では、手術療法**6%**、化学療法（抗がん剤）**5%**と回答され、あとは代替療法（自然療法）で治療するという（ジャーナリスト・船瀬俊介氏による）。



	手術	抗癌剤
Canada	6%	5%
Japan	100%	100%

公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6 丁目 8 番 1 号

TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

http://www.kenshin-shizuoka.net

E-mail: info@kenshin-shizuoka.net

カナダの肺癌専門医は、自分自身が肺癌になった場合、自分が受けた治療、すなわち代替療法を患者に施しているのだが、日本の癌専門医のほとんどは、保険に縛られ、ガイドライン、マニュアルに則って、(自分自身が望みもしない?) 三大療法を患者さんに施しているのである。

免疫療法と温熱療法を組み合わせたドイツの病院

ドイツにセント・ジョージ・ホスピタルがあり、医師16人を含むスタッフ160人規模の病院で、通常療法と代替療法を組み合わせた**統合医療**をすべて**保険診療**で行っている。このフレデリック・ダウス博士の末期の膵臓癌患者の10数年前の治療成績(右表)であるが見ていただきたい。膵臓癌の末期という、現在でも日本の癌専門医は匙を投げてしまい、患者さんは死を待つのみで、緩和ケアの対象である。

セント・ジョージ・ホスピタル(独) フレデリック・ダウス博士のデータ		
末期の膵臓がん患者 157人		
温熱療法+栄養療法+免疫療法など (すべて保険診療)		
完治	17%	改善 45%
不変	32%	死亡 7%
*日本ならば……死亡 100%!!		

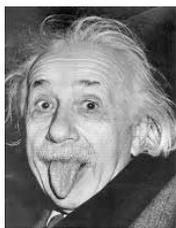
ところが、**温熱療法**、**栄養療法**、**免疫療法**を主体に、極少量の抗癌剤を用いしたが、**完治17%**、**改善45%**、**不変32%**(膵臓癌では死なない)、**癌死亡はわずか7%**であった。**日本ならば**、余命いくばくもなく、1年以内に**100%癌死**していたかもしれない。最近、日本で著名な芸能人の方々が3名ほど、食道癌で亡くなられたが、もし、彼らが欧米の代替療法を受けていたら、今も活躍されていたかもしれないと思うのは、私だけだろうか?

ガンの治癒率が最も高い療法: **ゲルソン療法** (ギネスブック掲載)

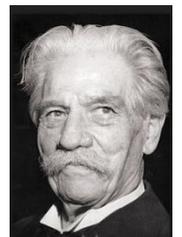


ギネスブックに「ガンの治癒率が最も高い療法」として掲載されている療法が「**ゲルソン療法**」です。ドイツ生まれの**マックス・ゲルソン**博士(Max Gerson 1881.10.18 - 1959.3.8)は、ミュンヘン大学医学部の結核専門部の部長だった頃、結核患者に**人参ジュース**やニンニクをはじめ**無農薬有機栽培の野菜**を搾って作ったスープなどを食べさせ、**500人以上の結核患者の98%以上を完治**させた。石油由来の新薬を使わない**自然療法**を提唱する**ゲルソン**博士は、製薬会社・医学界から**迫害**を受け、ミュンヘン大学を追われ、ウィーン、パリ郊外、ロンドンと移り、1936年ニューヨークに渡り、**ゲルソン療法**に基づく独自の病院を開院したのであった。

評判を聞きつけた癌患者がゲルソン療法の食事で治ったことを口外すると、迫害を恐れた**ゲルソン**博士は、初めは「癌のことなど知らない。結核患者のためのサポートはしたが、癌治療のためのサポートをした覚えはない」と弁解し



たという。しかし、評判はあつという間に広がり、**ゲルソン療法**は**癌の治療法**として人気を集めたのであった。**ゲルソン**博士は、**アルベルト・アインシュタイン**氏(左写真)の主治医としても有名である。また、ノーベル平和賞を受賞した**アルベルト・シュバイツァー**博士(右写真)とも親交があり、**シュバイツァー**博士自身の**糖尿病**をゲルソン療法で**完治**させ、**ヘレーネ**夫人の**結核**をも**完治**させたことから2人の交流が始まったと言われる。**シュバイツ**



アー博士は「**マックス・ゲルソン**は歴史上の**天才**である。**彼を迫害する現代の医学は間違っている**。」

20世紀の医学はのちに、「**医学の暗黒時代**」であったと言われるであろう」と述べたことは有名である。

ゲルソン博士は'58年、アメリカ医師会から**医師免許を停止**され、**免許剥奪の脅迫**を受けていた。翌'59年3月8日、肺炎で死亡したとされているが、石油メジャーが送り込んだ刺客(女性秘書)にヒ素を盛られて**急死**したと親族は語っている。(博士の孫 ハワード・ストレイアス氏) 果物や野菜で癌が治されたのでは、石油から作る抗癌剤の莫大な利権が脅かされてしまうからであったのだろう。当時、自然療法を実践する多くの医師が、**迫害**を逃れて国境を越え、**メキシコのティファナ**市で**30**を超える(今は60とも)**代替療法**を実践する**病院**を開院したのであった。

ゲルソン博士の三女**シャルlotte・ゲルソン**さんが今、メキシコのティファナ市に**ゲルソン病院**を開院している。「結核でも癌でも、完璧な栄養代謝で、人間が生まれながらにして持っている自然治癒力を高めれば治すことができ、しかも予防することさえ可能である」というのが**マックス・ゲルソン**博士の医療哲学であり、臨床記録を残している。

おわりに

癌は、体の極端な**栄養代謝異常**の状態であり、**癌細胞**や**癌の腫瘍**は**癌の一症状**であると考えられる。腫瘍を手術で切除しても、**癌細胞**を抗癌剤で叩いても、本体の栄養代謝異常を改善しない限り癌は治らず、いずれ再発・再燃するのである。**癌が稀な病気であった19世紀初頭と癌が増え続けた20世紀後半との決定的な違いは、「食生活の違い」**である。**癌にならない食生活**、すなわち、「**植物性食品中心の未精製・未加工の食事**」から始めてみようではありませんか。